平成２９年度　吉野ヶ里町立東脊振中学校　学校評価結果

1　学校教育目標	2　本年度の重点目標
自主的に学び合う生徒の育成	①　学習の構えを徹底し、学力向上を図る。 ②　いじめ防止と不登校への対応の充実など人権教育を中核に据えた生徒指導や特別支援教育の充実を図る。 ③　小中連携による校内研究の充実を図る。 ④　個性を伸ばす部活動の推進に努める。

3　目標・評価

①　学習規律の徹底と学力向上

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●学力向上	確かな学力の定着と家庭学習の充実	・１時間ごとに，「めあて」と「まとめ・振り返り」を全教科で１００％実践する。 ・全教科で，学び合う活動を取り入れた展開を実践する。 ・学習規律の基盤となる「学習の心構え」を徹底する。 ・定期テスト前に学習する範囲や内容を具体的に提示し，家庭学習の深化を図る。	・黒板に「めあて」「まとめ」のカードを貼り、それを明確にした授業を行う。 ・学習指導案に「めあて」「課題解決」「まとめ・振り返り」を明記する。 ・一人３回の授業参観を行い，学び合う活動の実践法について研究を深める。 ・定期テスト前に，学習チェック表を配布し，計画的に学習が進められるようにする。	B	・学習の見通しをもたせるための「めあて」を示すことは，ほぼ100%できているが，「まとめ」に関しては，その時間の確保が難しいことから確実に実践することはできなかった。１時間の計画や流れを明確にして授業に臨む必要がある。 ・相互の授業参観については，道徳の公開授業を中心に行い，各教科ではほとんど行うことができなかった。しかし，校内研究会において各教科での学び合う活動の実践法については情報を交換することができた。	・１時間の計画をもって授業に臨み，「まとめ」の時間を確実に設ける。また，生徒が書いた「まとめ」に対して，指導者が評価規準をもとに評価を行い，それを生徒の学習意欲の向上につなげるようにする。
教育活動	●学力向上	学習に対する興味・関心等を呼び起こし、豊かな心をはぐくむ、自由な読書活動の充実	・学年、教科との連携を図る。 ・図書資料の充実と環境づくりに努める。 ・朝読書の充実を図り、１人１か月に３冊貸出、年間７，０００冊の貸出をする。	・学年・教科と連携し、図書に関する情報発信の機会を増やす。 ・生徒が親しみやすく、利用しやすい環境づくりに努める。 ・学級担任と連携をし、朝読書の充実に努めると共に、委員会と協力し、定期的なイベントを開催し、本に興味をもたせる。	B	・学年、教科との連携については、総合の時間の図書館・図書館資料の利用と国語科の辞書の貸し出しなどで連携がとれた。 ・生徒が利用しやすい環境づくりは図書館の掲示、新刊の配置場所を入口から一番近い生徒の目の届くところに設置し工夫した。 ・委員会との連携では、月の取り組みに朝読書の期間を設けた。また、図書館フェアや読書クラスマッチなど生徒が興味を持つ企画を考え実行することができた。	・学年・教科との連携に関しては引き続き来年度も継続して活動する。 ・図書館の環境整備や委員会の行事と連携して生徒が図書館をすすんで利用できるよう促す。 ・今年度の本の貸し出し冊数は6240冊で目標の7000冊に760冊届かなかった。(2/16現在)来年度は目標が達成できるよう様々な図書館イベントを行いながら、貸し出し冊数増加に努めたい。
教育活動	●教育の質の向上に向けたＩＣＴ利活用教育の実施	ＩＣＴ利活用による学習内容の理解促進	・電子黒板等を利用した授業づくりを行い、電子黒板の活用率が90%を上回る。 ・ＩＣＴ利活用に関する職員研修を年２回以上実施する。	・電子黒板の操作・活用についての全職員研修会を実施する。 ・ソフト活用スキルアップについての小規模研修会を実施し、活用力向上を図る。	B	・教室の電子黒板にデジタル教科書がインストールされているので活用率は高く、５教科や道徳､特別活動において効果的な活用ができている。 ・ＩＣＴ利活用に関する校内研修については実施することができなかった。	・パソコン室の稼働率を高めるために､システム導入業者から講師を招き､使い方の研修を実施する。 ・本校のＩＣＴ環境の整備･改善について町の関係部署に働きかけを引き続き行っていく。

②　生徒指導・特別支援教育の充実

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●生徒指導	生徒理解と開発的な生徒指導の充実	・職員間で密な情報交換を行い、全職員で共通理解を図る。 ・毎週末に生活アンケートを実施し、いじめや問題行動の早期発見と対応を行う。 ・学校生活が楽しいと回答する生徒が前年度より５％上回る75%にする。	・生徒指導部会を定期的に実施し、情報共有及び生徒理解に努める。 ・いじめへの組織的な対応体制を作り、未然防止に向けて、定期的に職員間の情報交換を行い、共通理解を図る。 ・出番・承認・称賛による開発的生徒指導の充実を図り、生徒の自己肯定感を高める。	A	・週末に生活アンケートを実施し、いじめの早期発見に努めた。 ・学校生活が楽しいと回答した生徒は、1年生が93%、２年生が93%、３年生が96%であり、目標の75%を上回った。 ・LINE等で個人情報を拡散する問題が数件発生した。利用の仕方等指導することができた。 ・道徳教育の充実や行事などで生徒の自己肯定感を高めることができた。	・出番・承認・称賛を徹底し、生徒の自己肯定感を高める。 ・いじめ予防及び対策については、引き続き、組織として対応する。 ・生活アンケートは継続して実施する。 ・生徒のコミュニケーション能力向上を目的とした学級活動に取り組ませる。 ・保護者も巻き込んで、LINEやインターネットの利用に関するルールを厳守するよう啓発する。

教育活動	●心の教育 （人権教育）	人権意識を高め合い、自他を尊重する心情と行動力を持った集団の育成	・人権に係る道徳教育や学級活動に取り組み、差別を許さない意識と実践力を育てる。 ・人権集会などを工夫し、自他を尊重する心情を育てる。 ・職員研修を年2回実施することや校外研修に一人1回は参加することで、職員の人権･同和教育に係る意識と指導力を高める。	・道徳や学級活動の資料を共有し、実践を行う。また、指導内容等を通信などで家庭へ伝え、保護者との連携に努める。 ・人権集会や平和集会を生徒主体で開催し、人権意識や実践力を高めるとともに、生徒が達成感を味わえるようにする。 ・校外での人権･同和教育に係る研修会を職員に周知し、参加を促す。	A	・人権週間を年２回設定し、実行委員会を中心に各学年担当者、学級担任、ＰＴＡ学年活動部等との協働によって実施することにより、人権問題を自分たちの課題として捉えることができた。 ・東中人権アンケートからは「相手の気持ちを考えて行動している」生徒の割合が、５月の74%から12月は84%に向上していた。 ・車いすテニスの大谷桃子氏を招いて講演を聴くことにより「障がい」者に対する“ 心の壁 ”を取り除くことができた。 ・全職員が県内の各種研修会に積極的に参加し、人権･同和教育に関する知識を増やしたり理解を深めたりすることができた。	・年２回の人権週間をはじめ、平和教育や人権に関わる諸活動をさらに充実･発展させ、「東中人権宣言」の各条文が生徒たちの意識や行動として現れる学校にする。 ・「東中人権宣言」の行動目標の実現を目指し、「東中人権アンケート」の各質問に対する「そう思う」割合を90%以上に高めるための人権教育をさらに工夫していく。

③　小中連携による校内研究の充実

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●心の教育 （道徳教育）	小中の合同研修会や相互授業参観の実施	・小中合同研修会を年３回実施し、共通理解と協働活動を推進する。 ・全職員が相互に授業を参観する。	・道徳の学習指導案を小中で統一する。 ・学期に１回は、相互に授業参観できるよう時間割の調整をする。	B	・小中合同研修会を6月17日(学習規律と家庭学習)，8月2日(生徒指導)，8月3日(教育相談)，8月4日(服務，人権･同和教育)に実施して，意見交換ができた。 ・相互の授業参観は，公開授業以外では計画的にできなかった。	・授業が空いている者で参観に行くという対応ではうまくいかないので，予め，週案の中で割り振りをしておくようにする。

④　個性を伸ばす部活動の推進

領域	評価項目	評価の観点 （具体的評価項目）	具体的目標	具体的方策	達成度	成果と課題(左記の理由)	具体的な改善策・向上策
教育活動	●健康・体つくり	適切な体育・健康に関する活動の実践	・体力テストを年２回以上実施して、体力向上を実感させる。 ・体力テストの結果をもとに全ての生徒に個人目標をもたせ、実践への意欲を高める。	・保健体育の授業で、定期的に体力テストを行い、体力の向上を実感させ、運動有能感をもたせる。 ・体力テスト項目について、県や国の平均などを基に自分に適した目標を設定させる。	B	・領域の特性に応じて測定できたものとできなかったものがあったが、体力の向上を実感させ、運動有能感をもたせることができた。 ・県の平均を基に、自分に適した目標を設定させることができた。	・年度当初に重点項目を設定し、測定計画を立てる。 ・教科部会で全国体力調査の結果を分析し、重点的な取組を決定する。 ・部活動で重点項目の強化を図る。

3　本年度のまとめ　・　次年度の取組

・学力向上については、「めあて」「話し合い活動」「振り返り」「まとめ」を授業の柱として実践を行っているが、「めあて」については全職員が実践している。しかし、「振り返り」「まとめ」については、確実に行うことができていない。1時間の授業を確実に身に付けさせるために、「まとめ」を意識し、効果的に行う必要がある。また、家庭学習に関しては、テスト前の取組を行っているのでその効果について検証しより良い方法を探る必要がある。
・生徒指導については、今年度は大きな問題は起きていないが、ＳＮＳの利用など、生徒、保護者に注意喚起し、適切な利用をするようより一層指導が必要である。
・人権教育では、年に2回の人権週間や人権集会、また、講演会などを通して互いを思いやる心を育てることができた。次年度以降も、人権教育や道徳教育の充実をしっかり進めていき、生徒の自己肯定感や自己有用感を高め、自他を尊重する心情と行動力を持った集団を育成する必要がある。
・小中連携教育については、月に1回推進委員会を開催した。道徳教育を中心に生徒指導や学習規律、教育相談など各種の研修を合同で行うことができた。これらの合同の研修で小中の先生方との連携ができ、児童生徒の様子を知ることができた。しかし、お互いの授業参観はあまりできなかったので、計画的に進めていき、今後さらに連携を深め、小中一貫教育を見据えた取組を進めていきたい。
・部活動については、生徒たちが熱心に取り組み、県大会、地区大会において、好成績を上げた部活動もあった。結果にこだわり過ぎず、日ごろの練習を通して、技術の向上とチームワークなどの人間関係力や持続力、忍耐力なども鍛えていきたい。

●は共通評価項目、〇は独自評価項目